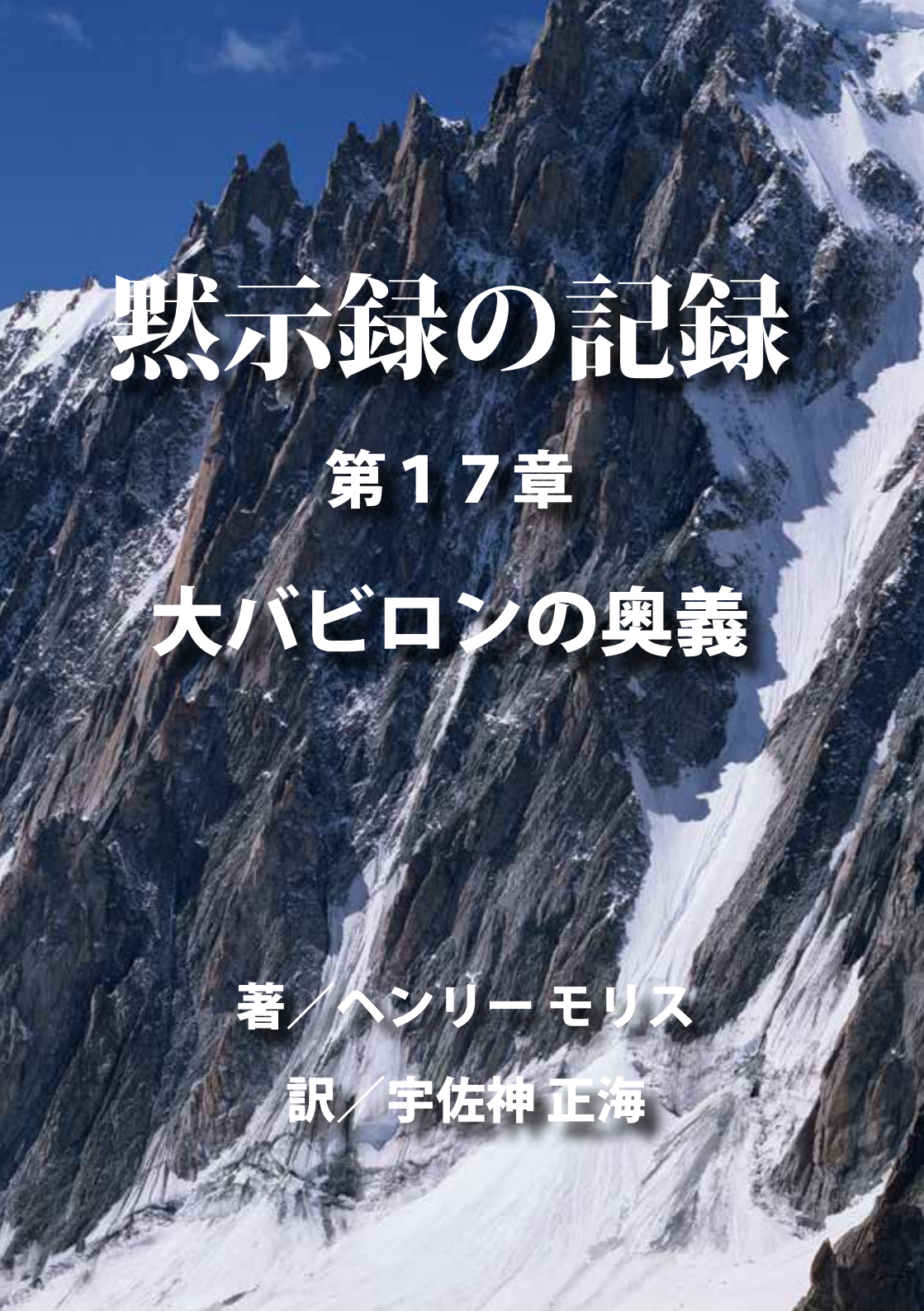

黙示録の記録

第１７章

大バビロンの奥義

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録17章　大バビロンの奥義

黙示録にはバビロンの都に関して初期に何か謎めいた言及が二つあり、ユーフラテス川に対しても同じような神秘的言及が二つあります。私たちが既に見てきたように、たとえ大部分の人がこの大都市バビロンは実在の都市ではあり得ないとの立場を取っているとしても、これらの言及を文字通りに受け取る方が良いことを示す正当な理由があります。もし、彼らがバビロンを実在の都市として受け入れる際には、彼らはそれをローマさもなければニューヨークまたは他の都市として受け入れるが、バビロンではないとします。

ヨハネが「バビロン」と書いた時、ヨハネが意味したバビロンを受け入れるのに気が進まない理由は何でしょうか。ヨハネが執筆していた当時でさえ、バビロンは、なおユダヤ人の有力な植民地【有名なバビロニアンタルムード；（タルムード；ユダヤの解説付きの市民法・宗教法典）は、バビロンかその近くで西暦五百年頃始まった】のある実在した都市で、そこには重要なキリスト教会もありました（Ⅰペテロ5章13節）。少なくとも、ヨハネが実際にはローマを意味していたのに（パウロは彼の書簡でローマについて直接書くのを恐れなかった、同様にヨハネもそうすべきではなかったのか）、こんなにも多くバビロンまたは偽りの教会（ヨハネを含め教会にあるすべての使徒たちは偽りの教師たちと偽りの教義について率直に痛烈に書いており、

彼らの教えを、象徴を用いて隠す必要はなかったはず）について書いているのは、ヨハネはヨハネが生きていた一世紀の読者だけでなく後の世代の人々をも混乱させることになるはずです。

再び強調されなくてはならないのは、黙示（啓示）は「覆いをかける」ことではなく「覆いを取り除く」ことを意味します。本文にはそれに反するどのような供述もないので、当然バビロンと云う言葉は、実在の都市バビロンを指していると考えなくてはなりません。けれども、バビロンはまた単に地方都市の立場を超えて全世界のあらゆる組織の中枢にもなるのです。

バビロンの主要な建造物が、結局ほぼ完全に使用不能に陥るという事実は、全然創造主の不意を打つ事にはならず、創造主の全知はバビロンが最終的に以前の卓越した地位と荘観さを再び現わす時をもあらかじめ知っておられることは確かに可能なのです。この本を書いている現在においてさえ、イラク政府は観光客を引きつけるため、熱心に大都市を再建しようとしていたのです。国連（あるいは、もっと適切には、将来の真の世界政府）の資産が、いったんその計画を強力に支持すれば、強力なバビロンがもう一度容易に設置され得るのです。黙示録17～18章の検討が進むにつれて、ますます明らかになることは、獣の偉大な世界帝国の首都が古代バビロンの戦略的位置の近くか、またはそのすぐ上に中心を置く、またはそのすぐ近くに設置される可能性がますます明らかになります。

大淫婦の母

バビロンは黙示録で6回その名で呼ばれています。黙示録14章8節で、「あの大きな都市」と呼ばれ、黙示録16章19節で「大バビロン」と呼ばれ、黙示録18章2節で「大いなるバビロン」18章10節で「大いなる都、力強い都、バビロン」、そして18章21節で「大きな都バビロン」と呼ばれています。ただ黙示録17章5節にだけ「彼女は秘められていた名…大いなるバビロン」と呼ばれています。最後のことばは明らかに他のことばとは異なる状況を伝えています。またその上に、見て判るように、六つの用語はすべて同じ基本的主題に言及していて、その主題に少なくとも真の都バビロンが組み込まれているのは確かです。特にバビロンと名付けられた節に加えて、それは四回「都」と呼ばれています（黙示録17章18節；18章16，18，19節）。尚、この都は大いなる「奥義」と関係しています。奥義は地上のすべての民族に及ぼすあの都の邪悪な影響を物語っています。

黙示録17章1節　また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。

最後の災害となる前例のない地球規模の地震が、世界の都市を完全に破壊してしまった時、ヨハネの注意を引いていたのは、これらの都市の一つである大いなるバビロンが、前代未聞の邪悪さ（黙示録14章8節に続く黙示録16章19節）に相応しいある強烈な裁きを受けようとしていることであった。バビロンはすべての国々に偶像礼拝というブドウ酒を飲ませていたので、創造主はバビロンにものすごい怒りのブドウ酒を与え

ようとしています。災害を齎(もたら)す天使達の一人、恐らく第七の天使が、今度はヨハネにこの裁きをよく見るために来るようにと特別な命令を与えます。

ヨハネはそれをただ「水の上にすわっている大淫婦へのさばき」と呼んでいます。そして、この絵で示された軽蔑的なことばがここで初めて用いられました。こうして、ヨハネは、すでに彼女の特性と影響が何かを知っていたことを意味しているかのようです。事実バビロンは、何世紀にもわたり創造主につく民の敵で、バビロンの偶像礼拝は、多くの国々に影響を及ぼしていました。恐らく、ヨハネはエレミヤ51章7節の「バビロンは主の御手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲んで、酔いしれた。」とか、また、イザヤ47章5節の「カルデヤ人の娘よ。黙ってすわり、やみにはいれ。あなたはもう、王国の女王と呼ばれることはないからだ。」のような節によって彼女の特性と影響を思い出させられました。

本文で、イザヤ書やエレミヤ書のバビロンに関わる預言は、主として彼らが生きていた当時のバビロンを指していました。これらの預言のかなりの部分は、ペルシャとその後のギリシャのバビロン侵入と略奪で成就しました。しかし、ヨハネはこれらの預言が他の多くの旧約聖書の預言のように、すぐ後に成就することと間を置いて後に成就する両者があり、前者はひな型で、最後の出来事の前触れという事を学んでいました。ヨハネの時代、バビロンは弱く無気力に思われたかもしれませんが、滅んではいませんでした。バビロンの不潔な偶像礼拝の風習は、バビロンが悪影響を及ぼした他の民族を通して生き続けていて、彼女自身いつの日か彼らを通してかつてなかったほどのひどい邪悪さをもって甦るはずです。

売春婦（ギリシャ語Ｐｏｒｎｅポルネ）と云う言葉は5節の淫婦と云う言葉と同じで、porneiaポルネイア（姦淫）とpornosポルノス（姦淫者または好色家）と関係があります。それは身体を売る女の人に向け

られているだけではなく、単に不品行を行う者なら誰に対してでも向けられることばです。特に、旧約聖書で、肉体の姦淫と密通は、しばしば霊的姦淫の象徴、すなわち、真の創造主よりほかの神々に仕え、愛している象徴と見做されました。この事は疑いもなくここでの第一の要点です。バビロンは、国として他の諸民族と文字通りの姦淫を行ってはいなかったが、多くの国々を真の創造主から遠ざけてしまったのです。しかし、この特別な罪はバビロン人の間では日常よくみられる現象でした。

黙示録17章2節　地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」

エレミヤ書51章7節は、ここと黙示録14章8節の両方を間接的に述べていることは明らかです。エレミヤ書は明らかにバビロンそのものに対する言及で、この節はそのことを指すに違いありません。しかし、バビロンが総ての国々とその住民を不品行への天罰で酔わせることが実際に出来るのでしょうか。エレミヤの預言と直接関わりをもっていたネブカデネザルは偉大な王で、後のバビロン帝国は、彼の時代最も偉大な帝国でしたが、ヨハネの時代にはネブカデネザルの帝国はずっと昔の出来事で、彼の後に続いたペルシャとギリシャ帝国も過ぎ去っていました。さらに、ネブカデネザルの時代にさえ、さらに偉大な諸民族がいました。例えば、極東やアメリカ大陸の諸国は、ネブカデネザルとバビロン帝国について聞いた事さえなかったのです。どうしてバビロンが彼らを偶像礼拝に導けたのでしょうか。

この状況を理解するために、ネブカデネザルのバビロンは、原初のバビロンでなかったことを思い起こす

べきです。実際のところ、ネブカデネザル自身、バビロンの初期の文化と宗教の復興に大いに携わっていたのです。ネブカデネザルは、寺院を建て、ハムラビとそれより以前の古代バビロン人の礼拝を再び制定していたのです。

従って、すべての国民を霊的姦淫のブドウ酒で酔わせたのはネブカデネザルのバビロンではありません。ダニエル2章にあるネブカデネザルの巨大な像によって暗示されているように、ネブカデネザルのバビロンを継承したメド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ帝国へとその文化の多くを伝達しました。そして、そのことはイスラエルの歴史にこれ以上あり得ない重要性をもったのです。何故ならバビロンへ七十年間の捕囚にイスラエル人を連れて行ったのがネブカデネザルだったからです。しかし、バビロンが伝達したものは、最初バビロンの祖先から受けたに違いありません。さらに、バビロンから遥か離れた古代中国、インド、インカやその他の人々の偶像礼拝とバビロン人の礼拝の間にある実に多くの類似性は、ネブカデネザルの王国から来たもののはずはありません。

ネブカデネザルはバビロン人のパンテオン神殿の主神としてMarduk(マーダック)礼拝を立て直しました。この名は通常Merodach（マルドゥック）とも書かれていて、この名はさかのぼるとニムロデに由来した可能性が強いことが分かります。（マルドゥックまたの名ベル＝マルドゥックはバビロニアの主神）

考古学と歴史の資料は、古代になるにつれて、ますます非現実的になります。不幸にも、これらの時代の最初に関しては特に混乱しています。それは進化論の誤った概念と見せかけ上、古い年代を与える間違った年代測定法（例えば、炭素同位元素による年代測定法）のためです。しかしながら、世俗的考古学者と古物収集家でさえ認めていることですが、知り得る最も初期の文明がシュメールとアッカド文明であって、その

両者ともにメソポタミヤに位置しており、その両者はそれらを受け継いだ古代バビロン帝国に文化的に宗教的に貢献したことです。ほぼ同じように古かったのはアッシリア民族で、バビロン帝国に隣接ししばしば彼らと入り混じっていました。

記念碑とこの世の記録の多くが不確かなので、権威者たちがこれら古代民族と都市の起源に関する真の記録にほとんど注意を払わないのは悲しいことです。霊感された聖書の記事が、これらの出来事に関する既知の事実すべてと一致するのです。

「彼の国は最初シナルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネであった。彼はその地からアッスリヤに出て、ニネベ、レホボテイリ、カラ、」を建てた（創世記10章10，11節口語訳）；「彼の王国の初めは、バベル、エレク、アカデであって、みな、シヌアルの地にあった。その地から彼は、アシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフ、」を建てた。（創世記10章10，11節新改訳）

それ故、ニムロデは、アッカド（ニムロデの王国の四都市の一つ：その首都Akkad、Agade)、エレク（Uruk、古代スメリヤの突出した都市)、アッシリヤ（とその首都Nineveh)、スメル王国（Shinar、ダニエル書1章2節にあるようにバビロンの同義語)だけでなく、バベルの創設者でした。ミカ書5章6節にアッシリヤは「ニムロデの地」とよばれており、時々、聖書ではアッシリヤとバビロン帝国は、ほぼ同一国家として取り扱われています。チグリス河に接しているニネヴェから二十マイル程離れたところで発掘された都市カラを、その地域の住人は今も「Nimrud ニムルド」と呼んでいます。バビロン郊外Borsippa ボルシッパーにある大きな階段状の塔またの名「ジグラート」の遺跡を、アラブの人々は「Birs-nimrud」（ニムロデの塔）と今なお呼んでいます。

それ故、原初のバビロンでその創設者であり最初の王であったニムロデにより設立された宗教体系が、後のアッシリヤ・バビロン人の宗教と哲学が交じり合った複合体の根底にあるとの推論が、聖書的に正しいと言えるのです。この推論は、また多くの平行した考古学、民族学（人種学）、文化人類学での同じような多くの指摘によっても支持されます。ただしこれらから進化論によるこじつけが取り除けられなくてはなりません。さらに「ことばが混乱」し、その結果離散し（創世記11章9節）、世界のあらゆる地域に散らされた部族が、この宗教的体系を伝えたのです。各々は固有の文化的特色をもち、ことばが異なったため各民族によって神々と女神たちのパンテオン（神殿）の呼び名は異なっていました。しかし、基本的体系は今なお世界中どこでも同じです。

宇宙の起源に関して、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教のように創世記1章2章に書かれていることを信じている人々を除いて、過去の又は現在のすべての民族や部族が一つの宗教体系を持っています。その宗教体系は、基本的に汎神論的（注①）、多神論的（注②）、進化論的（注③）、精霊崇拝的／心霊論的（注④）、占星術的（注⑤）、そして⑥偶像崇拝的宗教制度（注⑥）です。進化論的、多神論的、汎神論的、心霊論的、占星術的偶像崇拝のこの巨大な制度は、何らかの形で世界中の各々の文化に実質的に浸透しています。現代の進化論的科学万能主義でさえ、この古代の偶像崇拝を詭弁でごまかし複雑な外観を取っているものに過ぎません。創世記に現されているような特殊創造に基づいたものを除いて、すべての宗教と哲学は、創造主よりも被造物に仕え（ロマ1章25節）、こうして創造主によって有罪の宣告を受けているのです。彼らは、人間中心主義的（宇宙の進化過程での最高の到達点としての人を崇拝する）又は、超人的（人よりなお高度の進化を遂げた霊的存在を崇拝する）のいずれかです。彼らは彼らの創造主を故意に拒否するので言い逃れることは出来ません、創造主は、彼らを心の欲望のまま汚れに、恥ずべき情欲に、良くない思いに引き渡されました（ロマ1章24，26，28節）。こうして、地上のすべての住人は、ニムロデが創造主よりもサタンを選んだように、バベルでの原初の偶像礼拝のブドウ酒に酔っているのです。

注①：汎神論的宗教制度を取る人々は、宇宙の卓越した創造主より自然界宇宙が究極的実在と考えます。

注②：多神論的宗教制度を取る人々は、この神として祭られている宇宙自体は、自然界のいろいろな力と自然の仕組みが神々または女神として局地的に現わされたと考えます。

注③：進化論的宗教体系を取る人々は、これら人格化された自然の力が、人と多くの場合霊でさえなんらかの方法で存在のさらにより高い秩序を産み出すことができると信じます。

注④：精霊崇拝的／心霊論的宗教制度・アニミズム的な／スピリティスティックな立場を取る人々は、死んだ男と女の霊を含め、そのように生み出された霊たちは生き続け、尚より高い存在へ進化すると信じます

注⑤：占星術的考えを取る人々は、最も発展した存在は、星のように輝く天の軍勢と共に住むかまたは同じであり、したがって、これらの星々が地上の出来事をコントロールすると考えます。

注⑥：偶像崇拝的考えを取る人々は、これらの神々と女神たち、または人格化された力または自然界の仕組みが、それらを現わすために建立され、人よりなお高い到達点としての霊的存在を崇拝します。

黙示録17章3節　それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神・（創造主）をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を

持っていた。

天使は大バビロンに下される裁きを見せるためにヨハネを招いていたが、第一にヨハネは、バビロンの性質と行いに関して、その裁きに先立つ出来事を教えられなくてはなりません。それ故、もう一度ヨハネは霊にて、他の時と他の所に移されます（黙示録1章10章・4章2節）。彼の観察は、まさに患難期の終わりの地球に向けられていた。実際に地球は全世界に及ぶ激しい地震で揺り動かされていました。けれども今、ヨハネは明らかにバビロンの腐敗の歴史総てを観察するためにずっと以前の時間にタイムスリップしたのです。陸地と海の光景は大いに異なっています。それはただの荒野にすぎません。

このような状況に最もふさわしい時は、大洪水の直後です。水による大激変から現れ出た世界は、実際に巨大な荒野で、不毛で荒れ果てていて、洪水前の牧歌的な世界から著しく変化していました。けれども、それは清められた世界で、創造主を敬わない反逆者たちすべてが地から一掃されて、ノアとその直接の家族のみが生き残りました。邪悪な神の子たちが創造主を敬わない世界をこのような腐敗の沼地に導きました。全地球を覆う大洪水だけが腐敗の沼地を清めることが出来ました（創世記6章4～6節）。彼ら邪悪な神の子たちはみな、闇の鎖に繋がれ（ユダ6）、人間は、新しく出発する好機をもったのです。彼らは創造主に従うためのあらゆる動機をもち、そして、罪の恐ろしい代価による精神的外傷も実にひどいことを知っていたのです。創造主を敬わない大勢の人々と悪霊たちは共にきれいに取り去られて、新しい一族は確かに創造主に対し正確であり続けるはずでした。

しかし、サタンは拘束されていなかったし、なお命令に従う大勢の悪霊たちの領土と権力を持っていました。

サタンはすぐに創造主の働きに対する抵抗を再び始めましたが、今度のサタンの戦略は、より陰険なはずです。ヨハネは、以前に天に大いなる赤い竜のしるしを見ていて、竜に従って創造主に反逆するに当たって、天使たちの三分の一を引き連れているのを見ていました（黙示録12章3，4節）。また、ヨハネは竜のように7つの頭と十の角を持った容姿の獣が、海から昇って来るのを見ていたのです（黙示録13章1節）。そして、権力を行使し、竜によって獣に与えられた王座に就きます（黙示録13章2節）。

今、ヨハネはもう一度荒野のように大きく広々とした所から現れて来る同じ象徴を見ます。しかしながら、今度はその象徴的獣は黙示録13章の竜と獣の特徴を合せもっているようです。彼は、獣のように頭には創造主を汚す名を持ち（13章1節と比較せよ）、竜のようにその色は赤です（12章3節と比較せよ）。恐らく、そのしるしは竜と地上の政府と王たちを表しており、竜が地上政府に王たちを所有し、悪い目的のために用います。黙示録13章1節の獣は、ダニエル7章7節の獣と同じであり、また彼に先だって同じような三つの獣（ダニエル7章4～6節）がいたことを思い出します。同様に、この黙示録17章の獣は、彼の先に同じような七人の王たちがいて（黙示録17章11節）、第8であると云われています。これらの資料をみな総合して考えると、女が乗っているこの獣は、サタンにより出現させられ権勢を与えられた、歴史的に継承された世界政府の象徴です。

実のところ、これがノアの洪水後のサタンの戦略でした。創造主は人支配の原則を制定しておられた（創世記9章6節）が、明らかに一つの独裁的世界政府の原則を政治の原則と定めていなかったのです。実際に、創造主の人への特別な命令は、世界に散らす、即ち、全世界に群がり増えることだったのです（創世記9章1，7節）。それは政府機構は単純で局在しており、各集団内で平和と自由を維持するために役立つのです。その

代わりに、サタンはニムロデを用いて、すべての他の地域社会を征服し、最初のバビロンを中心にした独裁的な一つの世界政府を設立しようとしました。（創世記10章8～12節；11章2～4節）。

それ故、黙示録17章のこの獣は、年を経た竜・サタンによって絶えずそそのかされ活力を与えられるような、独裁的世界政府の原理を描いています。このような最初の政府が、ニムロデの下にあったバビロンの政府だったし、バビロンの同じ精神が、彼に続いて国を征服し続ける他の為政者を動機づけ活力を与えていたのです。その上、最後のこのような政府がまたバビロン一点に集中されるでしょうから、この節の獣の本来の意味は政治的バビロンを意味するのが最も事実に合っているようです。創造主と人の管理に対する創造主のご計画と歴史における創造主の究極的目的に敵対するヒューマニズム（人間中心主義）に立った政治センターであり続けるために、政治的バビロンは、竜によって支配され力を与えられるはずです。

では、この獣に乗っている汚れた女は一体誰か。天使は彼女を「大水の上にすわっている大淫婦」と呼んでいますが、ヨハネが彼女を見た時、彼女は獣にすわっていました。多分、獣は水の上にすわっている彼自身で、水は世界のいろいろな民族をあらわすと言われています（15節）。獣が象徴であるように、女は、彼女の名が秘められた形でバビロン（5節）であることを除いて、彼女自身が大バビロンと同じと認められるに違いないのです。

竜が獣に権勢を与えるように、獣は大淫婦を支えます。順番に、女は獣を見かけ上美しくし、獣が人間を支配しその管理権を得るのを容易にします。真の霊的花嫁・上にあるエルサレム、すべての母（ガラテヤ4章26節）を追い求める代わりに、むしろ多くの人々は、精神的売春婦、偽りの花嫁、バビロン、私たちすべてを欺く詐欺師を追いかけるのを好みます。大淫婦バビロンは、純潔なエルサレムと著しく対比した型で、

ある意味歴史の全過程は、本質的にこれら二つの霊的都市の物語です。こうして、獣が政治的バビロンを表しているのに、大淫婦は宗教的バビロンを象徴しています。前者は、政治の謀反と混乱であり、後者は、霊的謀反と混乱です。エルサレムは平和の都なのに、バベルは混乱の都です。

黙示録17章4節　この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持っていた。

美しい女王のように盛装して、大淫婦は、豪華な宝石と華麗な彩の衣装で着飾っています。大淫婦が絶えず真の創造主から彼らを引き離し、彼女と楽しみを共にするように人々をそそのかす誘惑は、創造主を敬わない人々にとって殆んど抗しがたい魅力です。彼女の延ばされた手には泡立つブドウ酒の満ちた美しい金の器があり、彼女の招待状は、世から世へと、国から国へと差し出され、大衆はそれによって騙され永遠の生命を失います。「他国の女のくちびるは蜂の巣の蜜をしたたらせ、その口は油よりもなめらかだ。しかし、その終わりは苦よもぎのように苦く、もろ刃の剣のように鋭い。その足は死に下り、その歩みはよみに通じている。」（箴言5章3～5節）。

これが偽りの宗教のやり方です。みせかけの誇示（見せびらかし）と官能的な満足によって、真の霊的生活の飢饉を覆い隠し、政治力によって支持された国の宗教（政治的バビロンに乗っている宗教的バビロン）は、華麗な神殿と金の像、宝石を散りばめた衣装、大理石の彫像、催眠状態の音楽と魅力的な香の薫（かお）りでその熱狂的信者を深く感動させます。過去と現在の多くの宗教制度で、特別なカルト集団の神や女神の名

において神殿売春婦と性的乱痴気騒ぎによってこれらのぜいたくは、さらに増し加えられます。

通常国家（又は国）によって承認され支持されたこのような宗教的礼拝は、人の宗教的性質を助長し、かつ人の肉欲的快楽の感覚に訴えます。それは、マルクス主義者の強化に用いる強力な催眠剤です、そして、事実、多くの文化でいろいろな麻薬を使用することによってそれ自体さらに活気づけられています。そのすべての主要な点は、ニムロデが制定した宗教体系であり、恐らく、サタンが、ずっと昔バベルの時代にニムロデに示したものでしょう。それを異なる時と文化に合うように修正し順応させた宗教体系です。

何世紀にもわたって、大衆は大淫婦の金の杯に加わり、姦淫のブドウ酒を飲まされてきました。天からのいのちを与えるブドウ酒の代わりに、その杯には愚かさと汚れで人を無感覚にする混合物、忌まわしい偶像崇拝と口に出すことすらはばかられる邪悪さ、さらに迫害された創造主につく聖徒たちの血がいっぱい盛られています。そして、すべては冒涜的なことですが、宗教の名において人々に提供されているのです。

黙示録17章5節　その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。

今まで女の人でこのような名を額に付けた人がいるでしょうか。古代に幾つかのところでは、売春婦たちは、額かまたは衣にひそかに彼らの名を記すことが慣例でしたが、ヨハネの幻にあるすべての売春婦と偶像崇拝者たちの女家長には、すべての人が見えるように誇らしい名と紋章で飾った長い肩書が付けられているのを見ることが出来ました。彼女は大いなる都バビロンであり、すべての霊的姦淫とあらゆる偽りの礼拝の源で、

それに付随する邪悪な習わしのすべてがまとわりついています。

憎むべき者（ギリシャ語bdelugma）と云う言葉は、偶像礼拝と特に関連があります。それは獣が宮に建てる憎むべき者の像に関して、イエス・キリストが聖なる所に建てる像に関して預言した時、「荒らす憎むべき者」（マタイ24章15節）と呼んで用いたことばと同じです。偶像礼拝は、実に有史以来偽りの宗教に固有のものでした。創造主に遣わされた預言者たちは、偶像礼拝の腐敗した影響が真の創造主に対する本当の礼拝に対してさえ影響すると公然と非難し絶えず警告し続けるように強いられました。創造主の十戒の最初の二つは偶像に関わらないようにとの指示であり（出エジプト20章1～6節）、また、ヨハネの手紙第一の最後の言葉が、偶像に抵抗するようにクリスチャンに警告して「子どもたちよ。偶像を警戒しなさい」（ヨハネの手紙第一5章21節）と書き記しているのです。

古代ギリシャの哲学者たちまたは近代のアメリカの学者たちでも、過去と現代の多くの知識人が木切れや石を礼拝するのを笑いものとするのは正しいが、彼らは、事実上、彼ら自身が想像した物を心の中で作り上げ拝んでいて、自分自身を神としているので偶像崇拝より悪いのです。そして、近代の進化論的ヒューマニズムとは何でしょうか。快い偶像礼拝に過ぎず、人を神に祀り上げ、団結した自己崇拝なのです。

聖書が、むさぼるものを偶像礼拝者と同じと見ているのは実に重要です（エペソ5章5節やコロサイ3章5節のように）。モーセの十戒の最初の二つは偶像崇拝を禁じているように、最後はむさぼりを禁じています。むさぼる人の底にある動機は創造主とそのみこころを拒否する、すなわち、創造主が与えてくれるものに満足しないで、物を渇望することにあるのです。真の創造主とその完全なみこころより優先する何物かを持つことが、創造主の見解では偶像崇拝なのです。イエスは「あなたがたは、創造主にも仕え、また富にも仕え

ることはできません」（ルカ16章13節）と言われました。この特殊な勧告が向けられたパリサイ人たちは、「貪欲」であったが故にキリストを嘲（あざ）笑いました。彼らに対しイエスは、「さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし創造主は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、創造主の前で憎まれ、きらわれます。」（ルカ16章14，15節）と云った。ここにもう一度同じことばがあり、イエスは、これら偽善の宗教家を忌むべき者の母の霊的子孫と同じとしています。仮に彼らが信心深く、切り刻んだ像を礼拝する形での偶像礼拝を非難したとしても、彼らはむさぼりを覆い隠す手段として彼らの宗教を用い、こうして、彼らがさげすんだ異邦人たちより彼らの偶像礼拝はより非難に値する、良くないものとなったのでした。

多くの聖書学者たちが、この大淫婦（売春婦）を霊的バビロンとしてだけでなく、もっと明瞭に、ローマカトリック教会と同じと見ています。そして、バビロニア人の宗教の教義と聖礼典の多くが、異教徒ローマへそれから最後に教皇制度のローマに伝えられたことを書き留めています。この教えに関する最も詳細な解説は「二つのバビロン」と題したアレキサンダー・ヒスロップの立派な業績に見ることが出来ます。

ローマカトリックに加えて、他の色々な正教会や同様の古代教会の教義の習慣の多くは、聖書よりも言い伝えに基づいています。これらの多くと古代の偶像崇拝のそれと対応する教義と実践の間に実に多くの類似点があり、一般にそれらは順次さかのぼってバビロンにその足跡をたどることが出来るので、年を経た売春婦はすべての民族に彼女の忌むべきブドウ酒を実際に飲ませていて、キリスト教国さえ含まれているのです。

しかし、霊的バビロンとはローマかローマカトリック教会かのどちらかであると云う事は、この大いなる

奥義、大いなるバビロンの長年にわたる地球全体への影響を実に過小評価していることになります。バビロンは、売春婦と地の忌むべきものすべての母です。彼女から古代の偶像崇拝、中国の儒教、アジアの仏教、インドのヒンズー教、シャーマニズム、道教、神道、アニミズム、占星術、魔術、降神術、シーク教と「多くの神々と多くの主」（Ⅰコリント8章5節）から成る全世界の巨大な複合体総てを齎（もたら）しているのです。

20世紀のアメリカで最も懸念される重大なことは、近頃の科学万能主義と、古代の大淫婦の母に由来した進化論に立つヒューマニズムから直接出て来たものです。前に述べたように近代の進化論は、どの点から見ても決して科学的ではなく、科学上のすべての事実に矛盾していますが、古代ギリシアと究極的にはバビロンの進化論的汎神論の再興に過ぎないのです。このバビロン哲学の現代的顕現には、かなり大きくクリスチャンの教義を覆（くつがえ）さなくてはなりません。すなわち、カトリック教会だけでなく、より多くのキリスト教の分派と宗派の教義までかなりひどく覆さなくてはなりません。その上、進化主義と均一説の有害な影響に加えて、華麗な欲望、礼典を重んじる官能主義、肉体感覚に訴える催眠薬、占星術（オカルティズム）の再興と古代の偶像崇拝の他の側面が、今日、あらゆる種類の多くの教会の健全な聖書に基づく教義の土台をはっきりと侵食しているのです。

この情勢は、もともと偶像崇拝の習慣に対する反応で身について来たか、真の創造主を認めようと捜し求めている他の偉大な宗教でも起こっているのです。即ち、キリスト教だけではなく、ユダヤ教、回教、ゾロアスター教、そしてこのような他の一神教信仰が、現代の進化主義と現代の貪欲（アラブのオイルカルテットを考えよ）によっておおいに悪影響を受けています。雑多な偽キリスト教のカルト集団（モルモン教やク

リスチャンサイエンスのような）は、すべて色々の異教宗教とキリスト教の混合から成り、すべては同じバビロニアにその起源をたどることが出来ます。さらに、真の創造者として創造主を認めているこれ等カルトでさえ、大部分が救い主としてのキリストを拒否し、救いのために自らの行為に頼っていて、結局、それはまた人間中心主義（ヒュウーマニステック）なのです。バビロンの「奥義」のこの見解は、実際に、その替え玉の宗教と真の創造主と贖い主を拒否する思いをすべての国民に吹き込んでいるのです。

黙示録17章6節　そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

霊的バビロンは偽りの腐敗した宗教であるばかりでなく、ひどく不寛容です。その宗教が何度も同じことを繰り返し述べたり、偽りの教えを繰り返しても教化出来ない時には、迫害で破滅させようとします。

宗教史で最も驚くべき側面の一つは、キリストとキリストに従う者に対する他の宗教の憎しみです。キリストの愛の福音と創造主の恵みによる救いであるキリスト教が過ぎ去ってしまったところでは、どこでも抵抗を受けています。恐らく通例、少なくともひと時、激しい迫害による抵抗を受けます。この愛なる創造主、聖なる旗印と慈悲深い救いに対する不合理な敵意はなぜでしょうか。ただ唯一の答えは、年を経た竜にあり、女の末である真の創造主、創造者で救い主であるイエス・キリストに対する竜の敵意です。竜は獣の政治力に活力を与え、獣は大淫婦の宗教的力を支配し、彼らは創造主の御業に抵抗し、滅ぼすために彼らが出来ることを果てしなく続けるのです。

それ故、有史以来、真の信者の多くがキリストの故に血を流してきました。多くのイスラム教徒や共産主義者その他の者たちが行っている侵略戦争によってではなく、彼らの証しを沈黙させようとする人々の脅迫と反訴（民事訴訟の続いているうちに、その訴訟手続きを利用して被告が原告に対して起こす訴え：非難合戦）に対し忠実に証し続けたからです。聖徒の血（キリスト降誕以前の殉教者たち）とキリストのために殉教した人々の血は、彼女の手にある金の杯に混ぜ合わせられていて、そこには、彼女自身の偶像崇拝と邪悪さすべてが混じり合っています。こうして出来上がった混合物は死に至る飲み物で、この飲み物は、彼女と地の住民の双方を酔わせ理性を失わせます。

この酔った大淫婦と彼女により血塗られた歴史を見て、ヨハネはとても大きい驚きで満たされました。この言葉は、20世紀の用語で用いられている意味ではなく、「畏敬」または「驚嘆」を表すもっと昔の用い方です。このような歴史は、実際に恐怖におののく人を惹き起こすのに十分です。ヨハネは、以前にはバビロンの邪悪な影響の驚くべき広がりを決して十分に理解していませんでした。しかし、今やヨハネは彼女の姦淫と偶像礼拝と殉教したすべての聖徒たちの血で酔っている言語に絶するこの婦人を見ています。そして、ヨハネ（私たちもまたそうであるように）は、驚くべき啓示をただ驚嘆しているだけです。

七つの頭

黙示録17章7節　すると、御使いは私にこう言った。「なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘義とを話してあげましょう。

ヨハネの驚きはその女と彼女の影響に向けられていたが、天使は彼をやさしく戒めます。大バビロンの「奥義」は、その女（即ち、バビロンで定着した宗教組織）だけでなく、彼女を乗せている獣（即ち、バビロンで設立された一体化された政治の全体主義的体系）をもまた必然的に意味します。恐らく、思い遣りのある譴責（けんせき）は、またヨハネ（そして一般にクリスチャン）が以前よりさらにこれら大いなる世界の動向と影響をもっと意識すべき事を示唆しています。最も多くのクリスチャンは、自分自身の必要と活動に振り回されて、創造主の大いなる計画とその計画での自分の位置づけをほとんど知らない傾向にあることは、実に悲しいです。

とにかく、奥義は今まさに明かされようとしています。女と獣の性質ばかりでなく、七つの頭と十の角に関する関係も理解されなくてはなりません。これは付随的な事柄ではなく、終わりの日に私達を導く欠くことのできない情報です。

黙示録17章8節　あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。

最初のうち、この天使の啓示はなお謎のように思われます。それが、多くの妙な解釈を導きだしています。過去のいろいろな解説者の心に、ニムロデ、イスカリオテのユダ、ネロ、その他反キリストと呼ばれる人の多くの候補者があり、多くの解説者は、彼らが死から甦り、幽閉されていたハデスから帰ってきて、当然最後の世界帝国の指導者になると考えています。このような解説は、人は罪人として死んだ後、最後の審判まで甦らない（ヘブル書9章27節；黙示録20章4-6節，12節）事実を無視しているのです。サタンはハデスと死のカギを管理できません（黙示録1章18節）。キリストだけが人を墓から連れ出せるのであって、聖書には、このように創造主を敬わない人々の場合、キリストが墓から甦えることを許可するとは示唆していません。

けれど、既に見ているように、獣は個人ではなく、サタンによって起こされ活力を与えられた専制君主による世界帝国です。この王国はかつて存在していたが、今は無く、将来復活します。しかし、それはある解説者が云っているように復活したローマ帝国ではあり得ないはずです。ですが、ローマ帝国は決して終わっていないで、ローマ帝国以来、進展したいろいろな王国や政治組織に受け継がれているのが事実です。

一方、バビロン帝国はこの獣について聖書が詳細に述べているすべてを完全に満たしています。それは最初の偉大な世界帝国で、ほぼ二千年にわたって、重大な権力を維持し続けました。たとえその都がペルシャ人に受け継がれた後、取るに足りない状態で生き残っていたとしても、ヨハネの時代、そして今、わたしたちの時代に、世界においてほとんど重要性がなく、バビロニヤはほとんど忘れ去られています。今までのところ、すでに見てきているように、聖書は、その偉大な首都がいつか世界帝国の首都になることを指し示しています。それはかつてあったが、今はなく、やがて来る（または、ヨハネにしたがってやがて来る日に存在すると言った方が良いかもしれません）帝国です。

勿論、このような王国が、底しれぬ所に入ったりそこから上って来る事はありません。しかしながら、この全光景は象徴であり、これら獣の王国は邪悪なものから出てきた特徴すべてを合わせ持っています。イザヤは、ネブカドネザル王のバビロンの没落を次のような驚くべき言葉で預言しています。

あなたは、バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌って言う。「しいたげる者はどのようにして果てたのか。横暴はどのようにして終わったのか。・・・」下界のよみは、あなたの来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王を、その王座から立ち上がらせる。彼らはみな、あなたに告げて言う。「あなたもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似たものになってしまった。」（新改訳）イザヤ14章4～10節

バビロンの邪悪な王（恐らくベルシャザル）は、地獄に落ちて行き、倒れたバビロン帝国の象徴として取り扱われています。しかし、人であるバビロン王は、実際には、彼を引きだし、所有し、力を与えたサタン自身によって導かれています。こうして、「バビロンの王に対する嘲りの歌」（イザヤ14章4節）は、人の王の先に真のバビロンの王、大いなる反逆者・明けの明星までを考えており、さらにイザヤ書14章12-15節へと進みます。サタンで明けの明星である彼は、黄泉の深淵に降った王と共にあり、遂には火の池に永遠に投げ込まれます。

しかしながら、あの獣、もっと正確に言えばサタン、しかし象徴的にいえば、王が黄泉に投げ込まれると同時に滅んだバビロン王国は、後日深淵から上ってきて、もう一度偉大な世界帝国となります（ダニエル5章22-30節）。

これは、歴史の進展過程で最も顕著な出来事となるでしょう。いわば、長い間死んでいた世界帝国とその

偉大なる首都が突然死から甦るのです。間もなく獣の刻印を受ける世俗的な人々の内に『驚き』（とりわけ、6節に非常に驚いたという同じ言葉がある）を喚起します。再建されたバビロンの壮麗な美しさは、獣が地上に住む人々を引き寄せる魅力として恐らく役立つでしょう。

このところに「世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者」と云う驚くべきことばが、ほぼ付随的に出てきます。これらいのちの書に名の記されていない人々は、恐らく、黙示録のこの部分を実際に読んで、このような生き返りを期待するように、既に教えられていたので、獣を見ても驚かないようです。そのために、獣の刻印を受けた人々は、異口同音にキリストを拒否し、永遠の死に引き渡され（黙示録14章9-11節）、こうして、彼らが母親の身体に宿った時に記されたいのちの書から彼らの名は消し去られます（黙示録3章5節；13章8節の検討を見よ）。しかしながら、宇宙空間と時間を同時に創造され、すべての時と宇宙で起こる事象のすべてを同時にご覧になる創造主の絶え間ない慎重な計画で、名前の消し去りは、名前の書き込みと同時に行われます。こうして、創造主の観点で、彼らの名は全く記入されなかったかのようです。それゆえ、その書から名が消されないように定められている人々は、創造主が彼らを選ばれ彼らが創造主を選ぶ人々です。

黙示録17章9節　ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。

名がいのちの書にある人々は、また知恵の心を持っています。従って、獣についてだけではなく獣に乗っ

ている大淫婦の性質をも見分ける事が出来ます。これは黙示録13章18節の「ここに知恵がある。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。」と同じ用語です。この節の後のほうに書かれている言葉で、獣の正体が世界の人に明らかになる前に、霊的に熱心な人々には人としての獣の正体を確定できる手掛かりが与えられます。同様に、世界のその他の人々が起こっていることを明確に理解する前に、聖書的知識を持つ人は、獣の王国と獣が養い育て用いている堕落した宗教体系の認識に関する必要な手掛かりが与えられます。

獣の七つの頭は、その女が座っている七つの山を現わすと言われています。この山は、一般には「七つの丘を持つ都ローマ」と解説され、それに伴って、その女はローマカトリック教会とされています。

けれども、このような同一視は幾つかの理由で間違いです。ローマカトリック教会は、ローマの七つの丘の上に横たわっているのではありません。その教会は世界中どこにでもあって、その本部がバチカン市だけにあるのです。さらに、多くの都市に七つの丘があり、ローマには七つ以上の丘があります。それに加え、ローマの様な丘（ギリシャ語 bounos）は山（ギリシャ語 oros）ではありません。そしてここで用いられているのは山です。

最も明瞭な解説が次の節で示されており、そこで、七つの山を七人の王として正体を明らかにしています。この章で述べられた獣である一人の王と共に。獣とは、サタンに支配された王国を指すことを既に知っており、一連の同様な王国の最初（最後）ですべては政治的バビロンから成り立っています。こうして、緋の衣を着た大淫婦は、有史以来七つの王国によって支えられてきているように思われます。

黙示録17章10節　五人はすでに倒れたが、ひとりは今おり、ほかのひとりは、まだ来ていません。しかし

彼が来れば、しばらくの間とどまるはずです。

大淫婦が乗っている獣の七つの頭は、このように七つの山として解説されていますが、これらは順次七人の王であることが明らかになります。山々を王たちと同じと取るためには、聖書のどこか別の所でこのような鎖に合致する例を見出す必要があります。即ち、山々はしばしば王国を表わし、各王国は通常傑出した王を頂点に置くことで、他の王国と同等に取り扱われます。

例えば、来る千年期でイエスが王となられる王国を預言して、イザヤは「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。」（イザヤ書2章2節）と述べ、預言者ダニエルは、同じ王国について、「・・・その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました。」（ダニエル書2章35節）と述べています。ネブカデネザル王の幻に出てきたこの山について説明し、その山が、長く続いた偉大な世界帝国を現わすこの大いなる像を打ち砕いてしまったと解説し、さらに、「この王たちの時代に、天におられる創造主は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。」（ダニエル書2章44節）と続けて解説しています。幻は、確かに合理的なのです。

獣と大淫婦が象徴している性質は、幻の中で関連した項目も象徴的であることを要求しているのです。象徴の意味は、その文の中で説明されていない時はいつでも、聖書の関連した文章にその意味が見出されるはずです。勿論、イザヤとダニエルの預言が、黙示録にある多くの部分の背景を与えており、このような文章から幻にある山々を上述のように結論付けるのは確かにふさわしいのです。

問題はどの王国を指しているかと云う事です。この点に関しても、ダニエル2章の像にそれを解く鍵があります。像の金の頭はバビロンに首都を置くネブカデネザルの大帝国で（ダニエル2章37，38節）、銀の胸と腕はバビロンにとって代わったメド・ペルシャ帝国（ダニエル2章39節；5章28節；8章20節）で、青銅の腹とももは、ペルシャにとって代わったギリシャ帝国（ダニエル2章39節；8章21節）を表わしていました。同じ様に、続いて鉄の脚は、明らかにギリシャと既知の西洋世界を征服した大ローマ帝国を表わしていました（ダニエル2章40節）。ローマ帝国はヨハネの時代になお政権を握っていたので、ローマ帝国は今あると記された王国に違いないのです。

これらの帝国の内、どの帝国も全世界を支配したことはなく、各々はその時代の最も偉大な帝国で、特にイスラエルの土地と人々に関して、さらに創造主のことばの宣言と世界における創造主の目的の完成に最も敵対した帝国でした。これら四帝国（バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマ）の前に、偉大な二つの王国・エジプトとアッシリヤがあり、その両者とも創造主と創造主のことばと創造主の民に対する絶えざる敵として留まっていたのです。

勿論、これらの国だけが、創造主とその目的に敵意を抱いている王国ではありません。この範疇にシリヤ、エドム、モアブ、ミデアンや多くの他の王国を入れることができますが、これらの国の一つも大規模で影響の大きい帝国となった国は有りません。他方、大昔の世界に偉大で権勢をほこった帝国—例えば、中国、インド、インカスなどがありましたが、創造主のことばや選民との接点は末梢的なことに過ぎませんでした。キリストと弟子たちの時代までで、この二つの基準にあう帝国は僅か六つだけです。さらに、これら六つすべては、政治的バベルの合法的継承者でなく、また同様に宗教的バベルの継承者でもありません。バビロニヤ、エジプト、アッシリヤ、ペルシャ、ギリシャ、とローマは皆進化論的汎神論と偶像崇拝の多神教と云う世界宗教すべての砦でした。こうして、彼らは大淫婦を支えている偉大な獣の六つの頭を表していると取るのが適切です。

では、ヨハネの時代の後に起こって来る第七の頭で表されたのはどの王国でしょうか。ローマ時代以降ユダヤ人とクリスチャンの両者に敵対したかなり多くの強力な王国（例えば、蒙古帝国、イスラム教徒、ファシズム信奉者と共産主義諸国）がありました。けれども、ここに預言されている特別な帝国は、最初の六つの帝国に比べ短い期間（しばらく）続くだけで、六つの帝国の各々は、何世紀にもわたって続いていました。さらに、第七の帝国は、他の六つ帝国の様に、獣に乗った女によって象徴されている大いなる偽りの宗教体系を支持し続けるに違いないのです。

この第七の帝国が何かを決めるのが困難な理由は、恐らくその帝国がまだ未来のことだからです。ダニエル書にあるいろいろな適切な預言、特にダニエル書二章の像の預言は、ローマ帝国が長い間続くことを示しています。その帝国が東と西に分かれることを示すその像の二つの脚は、結局、もともと一枚岩であった帝国に由来する二つの政治・宗教文化が今日に至るまで延々と続けられてきたことを示しています。こうしてより純化した意味で、古代ローマは今も存在しています。そして、異なる形ですが、今日ロシアにより支配されている「東側」と私たちが呼ぶ共産主義諸国と、アメリカ合衆国に導かれているイギリス、フランス、ドイツなどの資本主義諸国で、今日我々が「西側」と呼ぶ国々の中に生き続けています。一部は鉄、一部は粘土からなるダニエルの像の二本の脚（ダニエル2：33，41-43）は、歴史のこの特異な時代に多分うまく対応しています。

それ故、この意味で、力強いローマ帝国は、ヨハネの生きていた時代とヨハネが幻の中に天に移された日々の両者において、この問題を解く手掛かりの世界帝国として存在していたのです。それが今あるところの帝国です。

それゆえ、「まだ来ていない」帝国は、終わりの時代にダニエルの像の脚に当たる時期から起こる十の王国、ダニエルの像の十の足指に相当するに違いありません。これらはまたこの節で述べられている「十の角」でもあり、これらの王国ははまだ起こっていないので、これらが何を指すか憶測するのは恐らく早過ぎると思われます。多くの現代の教師たちは欧州経済共同体の国々を含むと思っています。6章で検討したように、神業とでもいうべきイスラエルを攻めたゴグとマゴクの撃退に続いて起こる政治的混沌、恐らく七年の患難期が始まるすぐ前、イスラエルへのゴグの侵攻に参加するのを拒否した幾つかの共産主義国も加え、十ヵ国から成る強力な新しい西側同盟の出現へと導きます。このヨハネが見た独特な幻に出てくる第七の王国は、恐らくこの同盟、さもなければ、同盟の中で突出したどこかの国です。ある人はこれを「蘇生したローマ帝国」さもなければ、さらによい「復興ローマ帝国」と呼ぼうとするかもしれません。

特に、ダニエルの像の脚の時期にある「一部は強く一部はもろい」ヨーロッパやアメリカの国々と文化、そこに一緒にいる名ばかりのクリスチャンは、大いる大淫婦の宗教が深遠で永久不滅であるための主たる保管室でもあったのです。既に言及したように、進化論的ヒューマニズムとオカルティズムの近代宗教は、何十年にもわたってこれら総ての国々の学校や公共団体に浸透し優位を占めており、事実、他の国々すべてに同じように広められています。しかし、これはニムロデがバベルで導入した年を経た異教徒の同じ組織の近代版に過ぎません。それは知性偏重の偽科学的衣装、宗教的儀式偏重、そして、二十世紀の味覚に合うよう

に潤沢な物質主義を身に纏っていて、きらびやかで洗練された婦人のように思われるかもしれませんが、その裏に隠された彼女は、同じ古代の大淫婦です。

十の国々の同盟からなるこの第七の王国は長くは続きません。恐らくその支配期間は、本質的に患難期の最初の半分で三年半です。ヨハネは患難期の折り返し点で、サタンに活力を与えられた獣が、すべての親戚、言語、国々を支配する力が与えられることを黙示録13章7節で既に知っていました。このことは次の節でさらに確かなものとされます。

黙示録17章11節　また、昔いたが今はいない獣について言えば、彼は八番目でもありますが、先の七人のうちのひとりです。そして彼はついには滅びます。

初めのうちは、この記述には食い違いがあるように思われます。獣の頭はただ七つだけで、七人の王と彼らの王国を象徴しています。しかし、今や七人の中から第八の王又はその王国が現れます。さらに、この第八の王は結局獣そのものであることが分かります。こういうわけで「昔は居たが今は居らず、やがて現れる（8節）」という奇妙な記述の答えがあるのです（8節）。おおよそ、イエス・キリストの復活を装おうと、そうでなければ、「生きている者で、死んだが、見よ、いつまでも生きている」方（黙示録1：18）としてのキリストの描写を少なくともまねようとしているかのように思われます。

私たちは、この獣、この罪の人が、実際彼自身をこのようなやり方で示すと前もって知らされていました。彼は、見たところ死ぬほどの傷を受け、見たところ死に黄泉に降った、それから突然甦らされたようで、底

知れぬ処から昇ってきたとの驚くべき話しをします（黙示録11：7； 13：3～6，17：8）。

この異常な出来事は、この獣が王と王国の両方をさしていて、実際には両者ともに死んでいるのに、見た私たちが目にはその両方が明らかに甦っていると分かる時、解決されます。その罪の人は、致命的と見える傷—死ぬほどの傷—を実際に受けますが、聖書は、彼が実際に死んでいるとは言っていません。もし彼が実際にハデスに降って行ったなら、彼は帰って来れません。何故なら、ハデスのカギを持っているのはキリストであって、サタンではないからです。そのような事情にあっても、サタンは底知れぬ処に縛られてはいないのです（黙示録20章2，3節）。

彼はキリストの許可された範囲で底知れぬ処に降ることも出来たし降りもしました。同じように、天の所で戦いを続けるために、底知れぬ処から昇ってくることも出来るのです。すでに述べたように、サタンは、この獣によって象徴されていると見做すことができます。サタンは彼の内に住み獣を元気づけるので、恐らく、彼が底知れぬ処から昇ってきたとの宣言は、サタンにだけ特別に当てはめることができます。獣は死んで横たわっている間、実際には深い人事不省または仮死状態にあっただけで、その間サタンから地獄についてさらに、竜の化身としてこれからこの世でなすべき役割についての啓示を受けていたのです。

同様に著しく似たやり方で、獣の王国はまた突然生き返ります。それは「第七のもの」なので、彼らすべての性質に与り、ある程度は、バベルからローマに至るこれら古代の諸民族すべての甦りを特徴づけているのです。これは驚くべきことではありません。古代帝国は政治と宗教面でみな同じ特徴を表わしているので、みな合わせて秘められた名、大いなるバビロンであることを明らかにしています。

多くの異なる旧約聖書の預言で、この最後の反キリストは、これら古代帝国の六つすべてと何らかの関係

があるのです。彼は、ダニエル書9章26節にあるローマ帝国と関係があります。そこには「来るべき君主の民」は、ユダヤ人によってメシヤが拒否された後エルサレムと神殿を破壊するとあります。ローマに先立つギリシャ帝国が四つに分けられた国の一つの頭（かしら）は、アンチオコス・エピファネスであった。ダニエル書11章21節の「卑劣な人」はエルサレムに対し邪悪さと暴行をほしいままにし、終わりの日の獣の類型と受け取られています（ダニエル8章23～25節；11章31～33節）。

ペルシャ人の中で、伝統的に「ユダヤ人の敵」は、アガク人ハマンであった（エステル記9章24節）。彼のユダヤ人皆殺しの陰謀は、彼を獣の適切な類型としています（エステル記3章8-10，13節と黙示録12章17節；17章14節を比較せよ）。同様に、エジプト人は、アブラハムの時代からエレミヤの時代まで、特にモーセの時代に創造主の民の敵であった。出エジプトのファラオは、イスラエル人の子供たちすべてを殺そうと企て、それによって彼は反キリストの類型ともなりました。その点でより直接、反キリストは特別に多くの節（例えば：ミカ5章5，6節；イザヤ30章31節；31章18節）で「アッシリヤ人」と呼ばれています。恐らく、彼らの起源と歴史で、バビロンとアッシリヤは近い関係にあったからでしょう（イザヤ23：13；ミカ5：6）。バビロンに関する限り、ニムロデは獣の類型で、ネブカデネザルの像（ダニエル3：1～7）は獣の像の類型であるばかりでなく、ここでは獣そのものが直接大いなるバビロンと同じに扱われているのです。

これらの古代の民族のすべてが、終わりの時代に物質的・政治的基準でのリニューアル（更新）を経験し、恐らく、千年期の諸民族に引き継がれるでしょう。例えば、エジプト人とアッシリヤ人は、共に主に仕えるとイザヤ書19章23～25節に述べられています。ペルシャは終わりの時に、ゴグとマゴグと同盟を結ぶ民族の一つとして述べられており、エレミヤ49章39節によると、エラム（特に、聖書ではペルシャと同じ）は、終

わりの時代に再び捕囚から連れ戻されるだろうと述べられています。

ギリシャとローマは、何世紀にもわたり存続していますが、最早政治的に大きな帝国ではありませんが、それにも拘らず、独立可能な国として続いています。そして、すべての西洋の諸国は彼らの哲学的文化的影響をなお明らかに表しています。勿論、エジプトもペルシャも今日なおに国として現存しており、明らかにバビロンを除いて、これらのすべては来たる千年期に活躍する諸民族となることでしょう。

バビロンは、事実、大きな都・世界帝国の首都として復活されます。地上でのこれら大帝国の第八となるのです。そして、丁度これら七つの世界帝国のすべてが甦る時、バビロンは彼らの中から起こります。今なお、秘められた形で、大いなるバビロンはニムロデ以来存在し続けているのです。バビロンは物的意味においても、決して消滅してはいないし、イザヤとエレミヤでのバビロンの完全な荒廃に関わる大預言もまだ実際に成就していません。今も、彼らは存在しています。エジプトとアッシリヤは千年期に栄える民族となりますが、バビロンはそうはなりません。「国々の誉であり、カルデヤびとの誇である麗しいバビロンは、創造主に滅ぼされたソドム、ゴモラのようになる。」（イザヤ13：19）。丁度バビロンの最後の最も偉大な王が滅亡へと急に追いやられたように、大いなるバビロンは、地が続く限り遂に荒涼としたところになってしまいます。

十本の角

黙示録17章12節　あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。

既に検討したように、第七の獣の頭にある十本の角は、恐らく第六の王国であるローマ帝国の残りから出てくる終わりの時の同盟国を構成します。この同盟は、バビロンからローマまで続いた歴史的帝国で第七のもので、短い期間、恐らく三年半だけ続きます。しかし、ある場合には、個々の民族は何世紀にもわたって存在し（例えば、西側のアメリカ合衆国、イギリス、フランス、イタリー、ドイツと東側のポーランド、ハンガリー、ギリシャ、ユーゴスロビアとルーマニアのような国々は、特にエゼキエル書38章に書かれているようにイスラエルの地でロシアとその同盟国が壊滅した後に、ここで預言された詳細を満たしている）彼らは、この将来の同盟が実行されるまで、大英帝国の様な力を持つことはありません。もちろん、上述の十の国々は、ただ推測によるもので、説明に過ぎません。すなわち、世界情勢がその同盟を形成するように導くまで、これらの国がどの国かを明らかにする方法はなく、これは教会の携挙の後と取るのが良いのかもしれません。

けれども、この偉大な第七の帝国は、ある時、ほぼ一夜にして形づくられるでしょう。十の国はその王国で真夜中に、「共同の王」としての権限を受けます。それは、恐らくゴグとマゴクの突然の壊滅のような大事件が、以前からあった政治的運動を最高潮にさせ、このような同盟を形成することを通して、差し迫った解決を要する全世界の問題解決を促進させて、これらの問題すべてを直ちに完了させるでしょう。

これらの計画と交渉で目立つのは、これら十の国の一つの国の指導者であり、その人は丁度、二年から三年の間、世界の独裁者・獣として認められる運命にあり、彼は歴史上の第七の王国と今の十の王国の継承者です。彼は多くの人の注目を集め、彼の努力を称賛するでしょう。そして、その他の事象の中で、彼はイス

ラエルとの七年の条約を締結し、イスラエルが彼らの神殿を再建し、彼らの古代の宗教儀式をすることを許します。しかしながら、彼と彼の王国は十の国の一つに過ぎないのに、彼らのすべては同時に彼らの個人的支配権を、国際連合に委ね、恐らく、十人からなる安全協議会（各国から一票）によって導かれる一つの王国によって支配されることでしょう。

黙示録17章13節　この者どもは心を一つにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。

これらの十の王国は平等な立場で始まりますが、彼らは徐々に獣の優位を認めるようになり、間もなく、彼らはあらゆる統治権を獣に譲渡し始めます。この節の「心」の意味は、意志または目的です。彼ら自身からまたは他の人々からどのような抵抗に遭うかもしれませんが、すべてを彼に明け渡すことが彼らの確固たる目的となります。

この明け渡しは、彼らの軍備と彼らの職権（「力と権威」）の両方を含みます。重要で強力な十のすべての国が自らの意思で各々の主権と軍事力を一人の人に明け渡すとは、驚くべき現象です。実際に、彼は途方もなく才気にあふれ、それでいて人をこわがらせる個性を持ち、並はずれた統率者としての魅力と政治的洞察力を兼ね備えた人、そして、全世界の創造主を敬わない人々に恐れと信頼の念を起こさせます。もちろん、これは一夜のうちに起こるのではなく、これは十ヵ国が三年半の間耐えるので、一度で起きるのではありません。事実、旧約聖書にある同じような預言は、最初はかなりの抵抗に会う事を示しています。ダニエル7章7節の「十の角」は、ここ黙示録にある住人の王と明らかに同じです。これらの三人は明らか

に彼らが「一つ心」になる前に説得されなくてはなりません。「十の角はこの国から起る十人の王である。その後にまたひとりの王が起る。彼は先の者と異なり、かつ、その三人の王を倒す。」（ダニエル書7：24）

この内部の軋轢が静められている間に、同盟した王国たちは、また同盟外の国々と戦わなくてはなりません。ダニエル書11章40-44節はどうやらこの期間を記しており、「北の王」と「南の王」との間に闘争があることを示しているらしい。これらの最初は、北アフリカと近東（エジプト、リビヤ、エチオピヤ、エドム、モアブ、とアモンが言及されている）にある国々の同盟になると思われます。北の王はロシア連邦の残りが取り込まれているのかもしれません。また「東からの面倒な情報」が述べられており、中国と極東の他の国々の巨大な軍隊がこの西の「国際連合」の形成を快く思っていない事を示唆しています。

けれども、このすべてが進行している間に、封印とラッパの大いなる裁きがすべての国々を苦しめ続けていること、彼らの政治的目標と軍事行動から多くの困惑を引き起こすことを忘れてはなりません。人間的に言うと、創造主の二人の証人から発される災害が見られ（黙示録11章6節）、また、その結果生まれた新しいキリスト信者に対し至る所で途方もない迫害があります。

その時、突然、二つの出来事が起こり、この出来事は電気でも通ったかのように、すべての民族を獣に急速に従わせます。第一に黄泉からの驚くべき甦りがあります。彼の敵の一人が彼を刺し殺します。そして、恐らく彼の葬儀はテレビを通して全世界で見られるでしょう。こうして、大勢の人々は彼が突然生き返る時もテレビを見続けており、彼が死と黄泉に打ち勝った驚くべき物語を詳しく聞かされます。それから、彼は、以前は打ち勝つ事も近づく事も出来なかった創造主の二人の証人に打ち勝ち彼らを殺します。

すでに苦痛、環境の大激変、麻薬と総ての人を巻き込んだ心の動揺を通して、既に半ば理性を失った世界

に起こったこのような驚くべき出来事は、彼が持ち合わせていると思われた絶対的力に反対する総ての人を黙らせるのに十二分でしょう。西側同盟の十の王国だけでなく、いのちの書に名の書かれている人々を除いて、地上に住むすべての人もまた彼を礼拝します。

黙示録17章14節　この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」

これは確かに聖書の最高峰の節の一つです。患難期の中間点で空前の勝利に酔いしれた獣は、自分自身をだまして、歴史上最も偉大な人として自分自身を示すべきとの考えに陥ります。彼は世界初の独裁者で、いまや、世界中の人は彼を拝みます。彼は死に打ち勝ち、何千年も天で生き続けてきた天にいる創造主の二人の最も偉大なしもべを殺している。彼は今や、相続権を主張して地上に帰って来る準備をしていると分かっている小羊をさえ征服する陰謀を彼の主人である竜の助けによって出来るのです。

しかし、年を経た竜は、全世界を、彼に属する罪人をさえ欺いています。結局、彼は最も偉大な王ではありません。小羊こそ総ての王の王です。小羊は創造主の御子です。主として、キリストはすべての人を創造された（黙示録４：11）。小羊として、すべての人を贖うために死なれた（黙示録５：９）。竜は到底御子なる創造主・小羊の敵ではありません。

彼は地上のこれらの王全てと彼らの軍隊をほんの短い間だけ動かせるかも知れませんが、それは彼らの断罪を決定付けるだけです。小羊はただ口から出る言葉だけで彼らに打ち勝ちます。主イエス・キリストは王

の王・主の主であるだけでなく、また、征服者たちの上に立つ征服者です。キリストは偉大なる勝利者であり彼に在って私達も打ち勝つのです。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。」（ヨハネ第一の手紙５章４節）。

獣はとてつもない軍勢を彼の配下に持っていますが、主は、義のしるしである純白で、汚れのない麻布の着物を着た（黙示録19章14節）聖徒たちと云う軍勢を持っています。これらは、地上の騒々しい烏合の衆ではなく、注意深く選ばれ「呼び出された、選ばれた、忠実な」者であることが証明された、まさに、被造物のエリートの人々です。三つのギリシャ語はそれぞれクレトス、エレクトス、ピストスです。創造主は多くの者を御自身の目的に従って呼び出だされ（ローマ人への手紙８章28節）、これらの中から主は特別な使命のためにある人を選ばれます「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」（マタイによる福音書22章14節）。その上に、悲しいことに、これらのうちの幾人かだけが忠実なのです。ある者だけが「よくやった、良い忠実なしもべだ」（マタイによる福音書25章23節）とのキリストのことばを聞くのです。救われた人の中で何人かは何の報酬も受けないのです（Ｉコリント人への第一の手紙３章15節）。「わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」（黙示録22章12節）。

このような裁きと識別力は、主に任せられなくてはなりません。とにかく、獣の軍勢を打ち負かす時、キリストと共にいる人々は、呼び出され、選ばれ、しかも忠実な人々です。他のキリスト信者は、この戦いの間、残念ながら天の御座に留まっています。ギデオンの３００人の選ばれたものが戦いに出ていく時のように。キリストの奉仕を委託されている信者として、私たちは呼び出され選ばれているのです。私たちもまた良い管理者として、忠実であることが見出されますように（コリント第一の手紙４章２節）。

黙示録17章15節　御使いはまた私に言った。「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。

ヨハネを連れ戻し、それから進んで奥義バビロンの大いなるしるし（1節）を彼に示すために時間を通り抜け、ついで、その意味を説明しようとし始めていた天使は、今度はしるしに現れた緋色の衣を着た霊的バビロンの運命を彼らに告げるために再び話をします。この淫婦はサタンによって活気づけられたとして、政治的バビロンを象徴している緋色の獣の上に座っているように見えていました。しかし、この獣は、前に海から上って来る（黙示録13：1）様子をヨハネに見られていました。こうして、ヨハネはその女がまた大水の上に座っているのを見たのです。

これらの水は、今では世界の多くの人々の象徴として説明されています。また、勿論その女は七つの山と七つの王国を表わしている獣の七つの頭の上に座っています。明らかに、これらの偉大な世界帝国は彼女の直接の支持者であるがそれに留まらず、またさらに、世界中のすべての人が、彼女を支持することを意味します。総ての国々はサタンによって騙され（黙示録12：9）、獣を礼拝し（黙示録13：8）、真の創造主と戦う準備をしています（黙示録16：14）。

荒れ狂う海の水は、同じように、他の聖書（ダニエル7：3；イザヤ57：20）にある創造主を敬わない世界の国々を象徴しています。事実、主イエスは、終わりの日を「地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよ

めくために不安に陥って悩む」（ルカ21：25）時として描写しています。

黙示録には「数えきれない多くの群衆」について述べている幾つかの別々の個所（黙示録5：9；7：9；10：11；13：7；14：6）がありますが、ここにだけ「群衆」と云う言葉が「人々、国民と国語」と分けた部類として挙げられています。その他の三つは、すべて互いに密着したグループの人々で、同一部族の人たち、同じ国の人々、同一言語の人々を表わしています。おそらく、この節は世界の創造主を敬わない人々の中にも大きなグループがあることを示唆しています。彼らはこれらの終りの日に部族、国民、言語的基準とは違ったグループを次から次へと設立します。同盟、商業組合、カルト集団、国際的政治秘密結社、そして他のこのような集団が「群衆」なのかも知れません。その群衆は地球規模の環境に含まれ、そこからその大淫婦が現れます。彼女は水の上に座っています。彼らは彼女をサポートし、彼女の淫行に与り、彼女と犯罪を共にします。

黙示録17章16節　あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。

年を経た淫婦が、まさに大いなる勝利を収め、全世界の人々を誇らしげに支配していたちょうどその時、彼女に不意に終わりが来ます。総ての陸地に、大きな教会と寺院、モスクと神社と彼女の名誉のために彫像が建てられていました。学校や家庭では、彼女の人生哲学が教えられ、彼女が礼拝されています。様々な職種にある祭司、修道士種々の相談役らは、人々を教え贈り物を受けます。税金もまたとてつもない組織の結

果として生じ、政治的バビロンは、宗教的バビロンの豊かさを実に豊富に豊かさを十分に維持し、ヒューマニズム（人間中心主義）宗教が合わさってすべてが統合された綜合的同盟が間もなく成就されます。

患難期がはじまる前に真の教会のすべての信者が去って、組織化された宗教がすぐに政治力支持の強力な道具が作動される。宗教的バビロンと政治的バビロンとは、既にある程度不均衡なくびきで結び付けられています。「教会と国家」が適切にかつ明らかに分けられたことは、歴史上めったにないことでした。各々は、自分自身の目的を達成するために常に相手を利用しようとして、お互いにかなり成功を収めています。

患難期の最初の半分、その間、獣は十の王国が連邦化した帝国にあって、自分の優位性を確立しようとし続け、彼は野望達成のために人の宗教的性質を用いる事が出来ると速やかに悟ります。彼の仲間である偽りの預言者（黙示録12章11節で取り扱った第二の獣）の特別な能力を通して、世界中に彼自身の狂信的礼拝を促進し、彼は間もなく多くの国々にかなりの信奉者を得ることができます。地上の住人に関して云うと、既に人間中心主義で人を礼拝する傾向を当然持っており、たとえ人を納得させる手段として奇跡を用いるとしても、すでに世界の頂点に上り詰めている輝かしいカリスマ性を帯びた王を偶像として礼拝する様に群衆をそそのかすのは、預言者に取って容易な事です。

彼が患難期の折り返し点で、遂に地球全体の独裁者の地位を得ると云う目標に達した時、世界の宗教のピラミッド型階級制の構成員たちは、疑いもなく、奪取した実を豊かに分け合い、人々と彼らの指導者に対しても多くの権力をふるい続けています。しかしながら、一度獣が世界の帝王になってしまえば、これらの宗教家たちを最早必要とはしません。それから、総ての人は間もなく獣を拝むようになり、獣の像は世界中いたるところで見られ崇められます。最早どのような宗教的仲介者さえ必要としないのです。何故なら人々は

偉大なるスーパーマンと同様にサタンを認めあからさまに礼拝するからです（黙示録13：4）。